

帯広市単独開催スタートから10年。 歴代ばんえい振興室長が振り返る 「ばんえい十勝」の歩み。



かつて旭川・帯広・北見・岩見沢の4市で開催されていたばんえい競馬が、帯広市単独開催となったのは平成19年のこと。以来10年の間、現場を東ねてきた歴代のばんえい振興室長に、今日までの歩みと今後の展望を語っていただきました。

ばんえい振興室初代室長
鈴木 新一 さん

平成19年1月～21年3月、初代ばんえい振興室長を務める。その後、帯広市商工観光部長、産業連携室参事を経て、現在は帯広観光コンベンション協会専務理事など。

ばんえい振興室3代目室長
田中 敬二 さん

帯広市東京事務所長、商工観光部まちづくり担当調整監を経て、平成23年4月～26年7月6日までばんえい振興室長。現在は帯広市副市長。

ばんえい振興室現室長
佐藤 徹也 さん

平成19年、ばんえい十勝発足時以来、ばんえい振興室職員として歴代室長を支える。平成26年7月7日よりばんえい振興室長。

ばんえい振興室2代目室長
合田 隆司 さん

帯広市行政推進室長を務めたのち、平成21年4月～23年3月までばんえい振興室長。その後、市民活動部長を経て、現在は十勝エコロジーパーク財団専務理事。

準備期間はわずか四カ月。 新生「ばんえい十勝」開幕

——一時は存続が危ぶまれたばんえい競馬ですが、帯広市単独開催が決まり、市の農政部に「ばんえい振興室」が誕生しました。まず初代室長となった鈴木さんから当時のお話をお聞かせください。
鈴木 平成十八年の十二月末、正月休み直前に内示をいただきました。翌年の元日付けで辞令が出て、ばんえい振興室長に就任。四月二十七日の開幕まで四カ月しかなく、まさに青天のへきれきでした。まず、ばんえい競馬調査特別委員会が単独開催の是非を問う議論を重ねるところから始め、これが終わったのが二月。それと並行して予算を通し、さらにレースの開催準備も進めるといふバタバタぶりでした。本当に初日の第一レースのゲートが開くんだろうかと不安でしたよ。四市開催時の組合（北海道市営競馬組合）のスタッフは管理職を含め三十六～七人、多くが専門職でした。組合廃止後、運営業務委託先のオッズパーク・ばんえい・マネジメントに移ったのは、そのうち十数人だけ。あて

がはずれ、市から臨時職員を集めて、なんとか無事にゲートが開きました。

——いろいろな意味で、ゲートが開くのかという不安があったのですね。

鈴木 四市時代と同じことをやるのではなく、とにかく何か変えてみようと思ひ、それまで土・日・月だった開催日を平成二十年に一部、金・土・日に変更しました。でもこれはうまくいかなかった。いつも月曜に来ていたお客さんに怒られました。競馬場の環境も変えたかった。当時はスタンドの空気が煙草の煙で真っ白で、床には馬券が散乱。これじゃ若い人は来ない。汚い、暗い、危険の3Kをなくそうと思ひて競馬場をきれいにし、分煙化しました。確か、競馬場の分煙化は帯広が最初だったと思います。

ファンの競馬場離れと ネット時代到来の狭間で

——その後、合田室長が就任されたのは平成二十一年ですね。
合田 単独開催初年度は話題性もあって売上げが伸びましたが、

私が就任したのは下降している時期。なんとか販路を広げようと懸命でした。就任二年目に「とかちむら」ができて、ばんえい競馬が観光資源として見られるようになり、入場者は五割増しになりましたが、売上げは別

もの。人数と売上げがなかなか比例しないんです。その頃、インターネット販売の売上げが増えたのですが、ネット会社の手数料が大きく、やはり経営を考えると帯広競馬場と直営場外で売りたい。そこで新しい場外馬券場をつくりました。

——旭川や北見の場外発売所がリニューアルしたのも、この頃ですね。

合田 ええ。ところが場外を増やしても、ネットには勝てない。近くに住んでいる人でさえネットを使うし、これまで競馬場で大枚はたいてくれた常連さんが高齢化し、足腰が痛いという理由で競馬場に来られなくなった。割り切って考えればネット販売は武器だと思ひますが、当時はなんとかして本場や場外に足を運んでもらおうと、試行錯誤していました。

売上げ低迷を救った ライターと運営方式

——その苦しい時代を引き継いだのが、三代目の田中さんですね。
田中 単独開催が始まった頃、私は帯広市東京事務所について、ばんえい競馬をマスコミに取り上げてもらうと働きかけていました。その後は商工観光部に移り、とかちむらを担当していたのですが、突然、振興室長の内示が出て…。
合田 この室長は誰でも務まるわけじゃない。市役所の中で私の後任は、ばんえい好きのこの人しかいませんでした（笑）。
田中 私が就任した平成二十三年度は売上げが一番底の時期でした。何をやってもうまくいかず、馬の数も減っていたので、それまで一日十二レース開催していたのを十一レースに減らし、徐々にライターを増やしました。ほかの競馬場のレースが終わっても、まだばんえい競馬はやっているという、いわば「隙間商売」です。もうひと勝負、という競馬ファンを狙った。これが当たって予想以上に売れました。そ

のかわり、きゅう舎関係者は大変です。当初は「俺たちを殺す気か!」と言われたことも(笑)。ただ、売れ始めると、「これだけ売れたらやめられないしょ」と言ってくれるようになりました。その間に三連単を売るシステムが整い、これも追い風になりましたね。

——運営業務委託先が変わったのも、この時代ですね。

田中 オッズパークさんにはそ

れまでの五年間、本当によく助けていただきました。しかし行き詰まるところもあり、市長にも納得してもらって、委託先をコンピュター・ビジネス(旭川市)に変更しました。とにかく「ばんえい競馬を続けること」と「税金を投入しないこと」。このふたつが私のミッションでした。幸いにも売上げが伸び始め、これはいける、と確信しましたね。

「三連単」で売上げ好転 マスコミの注目度も高まる

——そんな歴代室長の努力を現室長の佐藤さんが引き継がれたわけですね。

佐藤 それまでは三人の室長にお任せしてきました(笑)。幸い歴代室長の施策が実を結んだ時期で、売上げには恵まれましたね。

田中 室長の時代のナイター増加と三連単の発売が大きかった。首の皮一枚でつながったという感じがです。今でも覚えているのは、ばんえいの馬券を売っていた時に、「ばんえいは三連単売ってないんか?なら売れるわけないだろ」と言われたことです。

鈴木 ヘビューザーは三連単がないと買いませんからね。

田中 地方競馬の共同トータリゼータシステム導入で、ようやく三連単の発売が可能になりました。

佐藤 これが自前のシステムでやるとなったら実現していなかった。今の売上げの四十七パーセントが三連単ですから、三連単の導入は本当に大きかったですね。その間に中央競馬さんと連携・協調の動きが出てきて、全体の流れにうま

く乗ってきました。

——メディアに取り上げられることも多くなりましたね。

佐藤 大ヒットしたコミック『銀の匙 Silver Spoon』の影響は大きかったですね。アニメ放映が始まったのは田中室長の時代ですが、その頃から、メディア側から取材に来てくれるようになり、涙が出るほど嬉しかったですね。

田中 東京事務所にいた頃、NHKのスタッフに「ばんえい競馬の存廃はニューズ性があつたけれど、それがなくなったら単なる地方競馬のギャンブルだから取り上げにくい」と言われたことがあって。そのNHKが「ばんえいのドラマをやります」と言ってくれるまでになった。それが『大地のファンファーレ』ですが、あの時は嬉しかった。時代が変わりましたね。

佐藤 昨年、ふなっしーがばんえい十勝に來場した時も、先方からお話をいただいたんです。最近はお泊りして取材にいらして、知らないうちに番組になっていこともあったり(笑)。これだけ注目してもらえるのは「ばん馬」だからこそ。ありがたいですね。

田中 多額の寄附をいただいたの



乗り越えてきた苦労の数々 どんな時もレースは続ける

もありがたかった。おかげで、ふれあい動物園をリニューアルできました。

——それぞれの時代に、室長職としての苦労があったと思います。特に印象に残っている出来事を教えてください。

佐藤 ふるさと納税でも、ばんえい競馬に寄せられる寄附件数は群を抜いて多く、年間七百万円近い寄附をいただいています。

鈴木 私の時は、生みの苦しみ。四市時代の専門スタッフの穴埋めを市の職員でせざるを得なかったので人集めにも苦労しました。

田中 勤務時間も九時〜五時から

はほど遠く、一般の公務員とはまったく異なる生活ですから、適性がないと務まらない。ナイターだと帰るのが遅くなり、これがまたきつい(笑)。

鈴木 ナイターが始まった当初は、夜八時半までの勤務。そのうち九時半になって…。

佐藤 今は十時くらいですね。

合田 私の在任中には東日本大震災があり、ほかの競馬場が自粛する中、うちは開催したんです。批判もありましたが、結果、被災地に二百万円近く寄附することができました。

田中 自粛したら、経営が成り立たないですよ。私の時も何かあっても、判断に迷ったらまず出走させました。

鈴木 大雪の日もやりましたね。

佐藤 昨年は大雪でコースが見えなくなり、一日だけ休みました。合田さんの時代には、砂がひどい状態になっても開催したことがありましたよね。

合田 大雨で砂が流れてね。馬場がぬかるんで、長靴が埋まって抜けなくなるほど(笑)。それでも開催して、さすがに最終レースだけ中止しました。

田中 私の場合は、ほかにも馬コロナウィルスの蔓延など、マイナス要素がいろいろありましたが、その都度、何とか乗り越えてきました。

佐藤 世の中うまくいかないもので、上げ潮に乗っている時に足元をすくわれる。昨年十二月と今年六月、きゅう舎関係者の不祥事が発覚しましたが、こんなことがあってもお客さんがばんえい競馬を見放さないのは、本当に馬たちのおかげ。ばん馬だから応援していただける。この馬たちのためにも、きゅう舎関係者と一丸となって信頼回復に努めていかなければいけないと思っています。

最後の一頭まで拍手が 鳴り止まない唯一無二の感動

——改めて、ばんえい競馬の魅力はどこにあるとお考えですか？

鈴木 何と言っても、お客さんが馬と一緒に走ったり歩いたりして楽しめるのが魅力。特に「ばんえい記念」では、最後の馬がゴールするまで拍手が鳴り止まない。四市時代に初めて見て、これはすごいと感動しました。この魅力は変わらないと思う。

田中 東京事務所にいた頃、実はまだばんえい記念を見たことがなかったんです。とあるテレビ局のプロデューサーに「ばんえい記念を見ないで、ばんえいを語るな」と言われて初めて見たのですが、鈴木さん同様、感動しましたね。それ以来、すっかりばんえいファンになりました。馬券の当たり外れに関係なく、最後の一頭まで拍手してもらえる競馬なんてほかにない。ギャンブルではあるけれど、これは十勝が誇る文化です。ばんえいがなくなったら、この馬たちは地球上からいなくなってしまう。なんとしても残さなきゃ。売上げを伸ばすのも、ひいて



は馬のためです。

合田 ばんえいは、開拓の歴史を伝える貴重な馬文化です。なくしてはいけないし、地域全体で大事にしていかなければならないと思う。

佐藤 もともと競馬は好きでしたが、この仕事の前は中央競馬だけ。実はばんえいは見たこともなかったし、なんでレース中に止まるんだ？と思っていたほどです。それが今は、ばんえいの奥深さに魅了されていますね。

鈴木 単独開催が始まった年の十一月頃、フランスの重種馬協会から二十人も来場したことがあります。フランスでもやはり農用馬がトラクターに取って代わられ

ばん馬生産の支援が ばんえいの未来を拓く

田中 関係者が辛抱して辛抱してようやく十年が経ちましたが、まだ道半ば。課題は山積んでいます。**合田** せっかとお客さんも売上げも増えているのに、馬の生産数が落ちているのが一番の問題ですね。

佐藤 馬の生産数はこの十年で減り続け、今では年間、千百頭弱ですからね。

田中 ここにきてようやく賞金が上がって、馬主さんたちの状況も改善されてきていますが、やはり馬の数が足りない。

鈴木 これは単独開催が始まった当初からの問題でした。それでも当時は、競走馬が七百頭を超えていた。

佐藤 今は、五百頭弱です。四年前が一番、少なかったですね。春の能力検査を受けた馬も平成二十八年では二百頭くらい。四市開催の頃は受験馬数が一千頭だったと聞いています。やはり、ばんえい競馬を残すためには、ばん馬の生産数の維持が最大の課題です。昨年から帯広市生産者賞を設



て、その活用法がない。彼らはばんえいを見て、こんなレースもあるんだと驚いていました。この魅力は、フランスにまで届いている。やめるわけにはいきません。

田中 私の時も、イタリアから馬関係者がレースを見に来ました。馬が第一障害を越えるのを見て「このレースはヨーロッパでは無理。動物虐待だ」と言った。ところがゴールした後、感想が百八十度変わり、「あんな大きな馬を手綱だけで操るなんて、馬ときゅう舎関係者の間に深い信頼関係があった、馬が大切にされているのが分かった」と言ってくれた。馬をよく理解している人には分かってもらえる。あれは嬉しかったですね。



けていますが、これはあくまでも競走馬のレースに対してのもの。地方競馬全国協会にも協力を仰ぎ、もっと根本的な生産者支援をしなければと考えています。

田中 不安要素があっても、生産さえ続けば、ばんえい競馬は支持を得られると思う。十年続けて、ようやくきゅう舎関係者も生活できるようになった。次は、馬主さんが新しい馬を買おうと思えるように、そして生産者の皆さんが、もう一度、母馬に産ませてみようと思えるようにしていきたい。五歳、六歳の若い牝馬が牧場に戻って子馬を産んでくれたら、ばんえい競馬の未来は明るいと思う。やはり母馬が若いほうが、いい子

新しいファン層を取り込み スターホースの情報発信を

——最後にばんえいの未来について、お考えや今後の課題をお聞かせください。

鈴木 ばんえい競馬は、単独開催が始まった当初から、十勝の観光資源としてさまざまなところから支援を受けてきました。今、私は観光の仕事をしているので、これを支援する側にいます。少しずつ予算を増やし、ばんえい存続の力になりたいですね。

佐藤 最近は観光客が増え、女性だけのお客さんや、二十代、三十代の若いファンも増えました。女性たちの中には「ばん馬の目や顔がかわいい」と言ってくださる方が多く、「この馬のファンなので、馬に会うために来ました」とひとりで訪れる女性もいる。この新しいファン層を、どうやって広げていくかが大きな課題のひとつですね。

合田 今、私が勤務するエコロジパークでも「競馬場にはどうやって行けばいいんですか？」と聞かれることが増えています。「ばんえいを見てみたい」と思う人を

馬が産まれます。私の室長時代には、早く引退して生産牝馬になる馬なんていなかったけれど、今は増えていますから。

佐藤 最近では五歳で引退したクインフェスタなどがあります。牝馬の活躍は今後ぜひ見たいですね。**合田** フクイズミみたいに、思わず馬券を買いたくなるような魅力のある馬も見たいですね。——ところで皆さんは室長をご経験後、馬券が当たるようになりましたか？(笑)

合田 ない！ まったくない(笑)。**田中** どうしても思い入れのある馬を応援してしまっただけ、そうそう当たるものじゃない。

佐藤 ばんえい競馬は奥が深くで、予想が難しい。そこが面白さでもあります。ギャンブルとしてのばんえいの魅力をこれからもっと発信していきたいですね。それが売上げをさらに伸ばす唯一の方法ではないかと思っています。

